

令和3年度自己評価シート(中間評価)

校番	10	学校名	尾道北高等学校	校長氏名	藤本 秀穂	全・定・通	本・分
----	----	-----	---------	------	-------	-------	-----

(1)生徒が主体的に学ぶ力を育てる。

1 短期(本年度)経営目標

【短期(本年度)経営目標】 主体的な学びの育成 (自ら問いを振り返ることができる)		評価
【本年度行動計画】 ○生徒の主体的な学び、深い学びを育成する授業を実践する。(教研) ○「問う力」を育成し、授業評価で検証する。(教研) ○「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」では、地域やグローバルに関する課題を発見し、自己の学びにつなげ、進路目標を設定させる。探究的・体験的な活動を実施し、成果発表会を実施する。(教研)		B

【短期(本年度)経営目標】 学習意欲の向上・確かな学力の定着		評価
【本年度行動計画】 ○緻密な進路指導及び教科指導 ・模擬試験結果分析を行い、その分析内容を生徒の学習指導及び授業改善につなげ、生徒の学習意欲を向上させる。(進路)		B

【短期(本年度)経営目標】 新しい大学入試への対応		評価
○共通テストへの対応 ・共通テスト分析(5・2月)を行い、教科指導力の向上につなげる。(進路) ・入試問題研究を行い、その成果を授業、入試問題セミナー、定期考査問題の作成につなげる。(進路) ○パフォーマンス課題への取組、定期考査の活用問題の作成を通して、授業力、作問力をつける。(教務) ○外部団体が実施する検定やコンクール等を集約し、分掌と協力して生徒に提示していく(英検準1級以上、広島県科学賞、科学オリピック等)。(各教科) ○アクトグラフを活用して各個人の活動を振り返り、ポートフォリオ化を進める。(教研・学年)		B

2 中間評価のまとめ

主体的な学びの育成

評価結果の分析	<p>①生徒の主体的な学び、深い学びを育成する授業を実践する。 『「問う力」を育成する授業の実践～構造化した「問い」を基にした活用型授業の推進～』をテーマに、授業研究を進め、7月に全教員が研究授業を実施し、全生徒対象の授業評価アンケートを実施した。</p> <p>②「問う力」を育成し、授業評価で検証する。「問う力」の質問に対する肯定的割合は、全学年 76.9%、1学年 78.8%、2学年 74.4%、3学年 77.3%であった。</p> <p>③「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」では、地域やグローバルに関する課題を発見し、自己の学びにつなげ、進路目標を設定させる。探究的・体験的な活動を実施し、成果発表会を実施する。 ・1年生は、社会人講演会や卒業生講演会を受講し、働くことの意義や魅力を理解し、学問への探究心を高めた。 ・2年生は、学問探究を実施し、レポートを作成した。 ・3年生は、個人で探究活動を行い、全員が論文にまとめることができた。実験や調査を行った生徒は根拠を基に自分の考えを述べる事が出来ていた。対面での発表会は中止となったが、課題探究発表会(Web)で成果を公開する。</p>
今後の改善方針	<p>①②11月に公開研究授業を実施して、生徒の主体的な学びを推進し、学校全体の授業研究の質を高める。そして、その検証として授業アンケートを12月に実施する。</p> <p>③1年生は、探究のスキルを活用する課題解決学習に取り組む。2年生は、個人でテーマを定め、課題研究を実施する。その際、現3年生の論文を参考にするとともに、自分でデータを収集できるテーマ選びをしっかりと行わせる。</p>
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方針	<p>授業評価アンケートの「問う力」の質問に対する肯定的割合は、全学年で 76.9%となっており、令和2年度の74.3%から伸びている。今後目標値 80%に向けて授業研究を行い、主体的な学び、深い学びを育成していく。</p>

学習意欲の向上・確かな学力の定着

評価結果の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・模擬試験結果分析を行い、その分析内容を生徒の学習指導及び授業改善につなげ、生徒の学習意欲を向上させる。(進路) →9月に全学年で実施。例年生徒が体育祭の練習時に検討時間を確保しながら実施していたが、今年度は体育祭の縮小に伴い模試分析の時間の確保ができなかった。短時間での実施で十分な検討ができなかった。
今後の改善方策	模試データのダウンロードが、8月一斉閉庁間際であるため、一斉閉庁後と夏期休業明けの期間において、各教科で模試分析日を設定する。教科内での模試分析の充実を図る。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策	学力の一層の定着に向けて、現状分析をしっかりと行い、学年毎のみならず全体で共有していく方法も検討する。

新しい大学入試への対応

評価結果の分析	<ul style="list-style-type: none"> ○共通テストへの対応 (進路) →8月末締め切りの入試問題分析の提出状況は29/41であった。共通テストの分析が5教科中2教科にとどまった。 ○パフォーマンス課題への取組、定期考査の活用問題の作成を通して、授業力、作問力をつける。(教務) それぞれ、パフォーマンス課題への取組、定期考査の活用問題の作成の各教科の評価 国語 BA, 地公 BB, 数学 BB, 理科 BB, 保体 BB, 芸術 B×, 外国語 BB, 情報 BB ○外部団体が実施する検定やコンクール等を集約し、分掌と協力して生徒に提示していく(英検準1級以上、広島県科学賞、科学オリンピック等)。(各教科) 広島県科学オリンピックを除き、応募状況は例年並みである。受賞については結果待ちである。 ※英検取者 15名, 広島県科学賞(理科 5名応募), 国語感想文(県選考 1名), 文芸祭応募(国語 1年全員) 英語スピーチ・レシテーション県入賞(3名), 英作文コンテスト(2名応募), 科学グローバルサイエンスステップステージ(理科 1名) ○アクトグラフを活用して各個人の活動を振り返り、ポートフォリオ化を進める。(教研・学年) 現在、各種活動を行った際に、紙のプリントに記述しファイリングしている。Classiにも活動記録があるが記録の補助的な扱いに留まっている。
今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> ・教科主任を通じて未提出者に提出を促す。 共通テスト分析においても同様に提出を促す。改善方法の一つとして、年度末に2年生に対して行う「パワーアップセミナー」にて、当該年度の共通テスト分析を生徒向けに講義する時間を設けることが考えられる。 ・すべての教科で、パフォーマンス課題への取組、定期考査の活用問題の作成はできている。今後は、さらに質の向上及び授業力・作問力の向上に結びつける。 ・受賞状況を共有するとともに、ICTを活用したコンクール等の案内を継続し、参加意欲の向上を図る。 ・今後、デジタルでのポートフォリオ化を進めるために、課題を洗い出し、その解決策を検討し、来年度実施を目指す。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策	教科ごとの分析については、判断材料が少ないとの指摘があった。自己評価をもとに、活用問題等の質の向上に向けて、各教科での検討を行いたい。

(2) 自他を尊重し、豊かな人間生活を培う。

1 短期(本年度)経営目標

【短期(本年度)経営目標】 生徒主体の活動の活性化	
【本年度行動計画】 ○チューター制の充実(生徒指導) 上級生が下級生に学校生活や学習指導を導く(前期中に10回実施) ○生徒会主催の行事の充実(生徒指導) ・球技大会などの学年やクラス毎の行事で仲間づくり行う。 ・学校行事での生徒主体の場面(生徒が決定する部分)を増やす。 ○生徒の活躍を評価し校内独自で表彰する。(生徒指導)	評価 B

【短期(本年度)経営目標】 自律的で社会に貢献する態度(ボランティア精神など)	
【本年度行動計画】 ○マナー指導を充実させる。(生徒指導) ・交通マナー、相手を思う気持ち、尊重する態度を身に付ける。 ・生徒会が中心となり、前・後期各2回以上登校指導を行う。 ・PTAと協力し、交通マナー向上を目的とした下校指導を行う。 ○全校生徒に対して、個人、団体に年に1回以上のボランティア参加を促す。(生徒指導)	評価 B

【短期(本年度)経営目標】 生徒一人ひとりの学校生活が大切にされた、相談しやすい体制の構築	
【本年度行動計画】 ○教育相談体制を充実させる。(健康教育) ・定期及び随時の特別支援教育会議・プロジェクト会議を開き、情報の共有や対応の協議をする。 ・スクールカウンセラー(SC)を効果的に活用(面談・研修会)し、生徒・保護者・教職員への支援を行う。 ○不登校予防を行う。(健康教育・生徒指導) ・心理検査及び教育相談アンケートの活用、面談実施から要支援生徒の早期発見・対応につなげる。 ・構成的グループエンカウンターによる学年開き・クラス開きを行い、新入生が早く高校生活に慣れ、学年やクラスに所属感を持てるようにする。 ・欠席生徒に対する早期面談により、原因を探り、長期欠席生徒を減らす。	評価 B

2 中間評価のまとめ

生徒主体の活動の活性化

評価結果の分析	チュータリングを6回実施した。事前指導を含め12回の実施である。当初設定していた前期10回の実施について、新型コロナウイルス感染症拡大のため実施できなかった内容がある。内容としては、年度初めから本格的に取り組んだが、学校生活や行事、学習のことなど、2年生チューターから1年生へ良い形でアドバイスをすることができた。生徒会行事などは、縮小や中止を余儀なくされたが、できる範囲の中で最大限の活動はできた。
今後の改善方策	後期に向けて、球技大会の実施や、生徒会活動の活性化に向けて、生徒主体で自己決定の場を設けられるようにしていく。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策	チューター制の取組みに対して生徒の93.7%が肯定的にとらえており、今後も生徒が主体的に取り組めるようさらなる充実・深化を図りたい。生徒会活動の活性化に向けて、小中高の連携も前向きに検討していく。

自律的で社会に貢献する態度(ボランティア精神など)

評価結果の分析	交通マナー等は大きなトラブルもなく守られている。一部生徒のマナーの悪さが取り上げられることが多いが、ほとんどの生徒は交通マナーを守って生活している。一部生徒には、個別に指導したりする必要がある。PTAとの登下校指導や、生徒に対してのボランティア参加の呼びかけ等、できていない。
今後の改善方策	新型コロナウイルス感染症の感染状況を見て、あいさつ運動や下校指導など、生徒が主役として活躍できる取り組みを行う。

学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方針	自転車のマナー向上、安全対策について、生徒自身が考え、生徒から生徒へ呼びかけを工夫する。
-----------------------	--

生徒一人ひとりの学校生活が大切にされた、相談しやすい体制の構築

評価結果の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談体制の充実について、一昨年度より教育相談窓口を各学年に配置し、学年主任や担任等と部の連携を組織的に行えるようになってきた。また、プロジェクト会議等、教育相談に関する会議についても、定期・随時に実施し、生徒の情報共有や対応協議をした。 ・スクールカウンセラー(SC)の活用として、通常のカounseling後にSCと関係職員・教育相談担当との連携会議を毎回行っており、定着してきた。 ・教職員対象(2回)、生徒対象研修会(各学年1回)を計画・実施し、教職員・生徒への支援をおこなった。 ・不登校予防については、心理検査(1回)や教育相談アンケート(春休み明け・GW明け・夏休み明け・秋休み明け)を実施し、支援が必要と思われる生徒について部による面談を行った。その内容を担任・学年団・職員全体にフィードバックすることにより、生徒理解をすすめた。 ・新入生については、コロナ対策を講じながら、入学後すぐに構成的グループエンカウンターを実施した。実施後のアンケートでは、高校生活への不安が減っており、概ね満足であるとの回答が得られた。 ・9月末時点欠席30日以上は3名。学年主任会等で欠席時数の共有により、気になる生徒に早めにアプローチできている。積極的な前向きな声掛けが、未然防止につながっていると考えられる。校長先生からの面談が、保護者への意識改革につながっていると予想でき、家庭での指導につながっていると考えられる。
今後の改善方針	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月の「ライフガイダンスルームだより」の発行、SCによる「こころとからだの相談日」について、生徒や保護者に周知する。毎月の広報と合わせ、継続していく。「ライフガイダンスルームだより」については、月替わりで部員のコラムを載せており、生徒が相談しやすい体制をつくる。 ・SCとの連携会議、プロジェクト会議等の教育相談にかかわる会議をタイムリーに開き、気になる生徒に対して、組織として早期に対応できるように取り組む。早期の面談も設定する。 ・朝学習に遅れてくる生徒が後期から増えてくるので、リスタートとして、再度ルールの徹底を促す。夏休み明けから急激に欠席が増えている生徒については、早めの家庭訪問と、面談を設定する。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方針	欠席が増加傾向にある生徒に対して、早めの対応、面談などを進めていく。

(3)保護者・地域社会・国内外に開かれた教育活動を展開する。

1 短期(本年度)経営目標

【短期(本年度)経営目標】 保護者への情報発信の充実 近隣の中学校や地域社会への説明責任 国内外の他校(姉妹校)との連携	
【本年度行動計画】 ○学年懇談会の実施(各学年・総務) ・保護者との意思疎通を図り、学校家庭で連携しながら教育活動を行う。 ○学校通信、進路通信等を充実させる(総務部、進路指導部) ・生徒の様子を保護者に伝え、保護者の協力理解を図る。 ○生徒募集活動を充実させる。(総務) ・オープンスクール ・中学生の訪問受け入れ ・中学校主催の進路説明会 ・本校主催の入試説明会 ○広報誌やホームページを活用し、本校の取り組みを中学校や地域に広く案内する。(総務) ○広報用資料(学校パンフレット等)の充実を図り、中学校や地域へ広報活動を行う。 ○グローバルに関する活動への啓発を行う。	評価 B

【短期(本年度)経営目標】 限られた時間で成果をあげる工夫	
【本年度行動計画】 ○時間外在校等の縮減と勤務時間・健康管理を意識した働き方の促進をする。(管理職) ○学校及び教師が担う業務の明確化・適正化。(管理職) ○学校の組織運営体制の在り方を見直す。(管理職)	評価 B

【短期(本年度)経営目標】 ICTを活用した業務改善や授業改善	
【本年度行動計画】 ○すべての教職員がClassiやMetaMoji、G-Suite等のアプリケーションを活用した授業実践や業務改善を行う。(ICT)	評価 B

2 中間評価のまとめ

保護者への情報発信の充実・近隣の中学校や地域社会への説明責任・国内外の他校(姉妹校)との連携

評価結果の分析	○総務部 入試説明会の参加者数が昨年から倍増したことやオープンスクール参加者数が昨年を上回ったことより、本校への関心度が上がっていると判断できる。広報誌発行数やHPの更新状況は年間目標値の半分に到達しており、概ね順調である。 ○進路指導部 ・生徒の様子を保護者に伝え、保護者の協力理解を図る。 →6月に進路通信を発行
今後の改善方策	○コロナ禍における、行事スタイル変更の柔軟性を保ちながら、後期行事についても計画的に実施していく。グローバルに関する生徒の活動意欲が減衰せぬよう、新しい形での国際交流を提案していく。 ○6月はその後に行われる三者懇談についての確認をおもな連絡事項とした。次号は冬の三者懇談用とするか検討中である。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策	学年懇談会の実施や、情報発信のさらなる充実を図る。オープンスクールでの、尾道市外の中学生保護者にもきめ細かな情報発信を工夫し、拡大していく必要がある。

限られた時間で成果をあげる工夫

評価結果の分析	昨年度と比較して、時間外在校等時間は平均して減少した。しかし、業務の偏りにより時間外在校等時間が多めの職員もいる。
今後の改善方策	業務の平準化を推進するため、時間外在校等時間の多い職員の業務を組織として他の職員と分担することやあまり必要でない業務と本来学校が行わなくてもよい業務を削減する。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策	業務量の削減につながるように、アンケート集計などICTの活用を進め広めていく工夫を行う。

ICTを活用した業務改善や授業改善

評価結果の分析	ClassiやMetaMojiの研修会を複数回実施した。Classiの機能を積極的に活用している教科が増えたり、MetaMojiを利用した授業を実践している教員が増えたりしている。
今後の改善方策	教科の特性にあわせた研修会を実施することで、更なる活用を推進していく。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策	ClassiやMetaMojiの活用を今後も進め、より一層の授業の充実と効率化をはかる。アンケート集計にClassiを活用して業務軽減を進める。